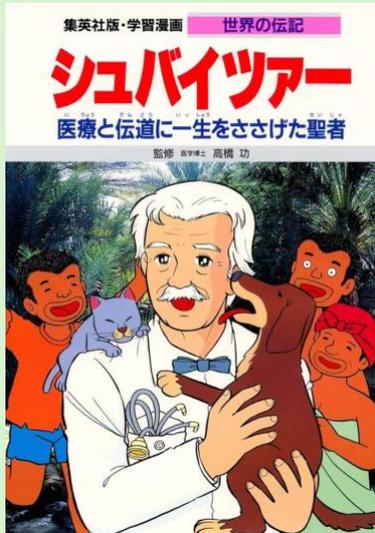


豊明希望チャペル礼拝

2025/3/23

「神の義」

ローマ人への手紙 10：1～4



アルベルト・シュヴァイツァーという方の名前を聞いたことがあるでしょうか。この子ども向けの本には、世界の偉人として、「医療と伝道に一生をささげた聖者」とあります。ドイツ語を話すフランス人(アルザス人：ドイツ人?)として生まれ、ノーベル平和賞をとった人として有名です。この方を特に日本に紹介したのは、内村鑑三だとも言われますが、私も子どもの頃、あこがれたものです。おもにアフリカのガボンの人々の医療のために仕えた医者でした。人間の命の尊さを説き、そのアフリカでの彼の経験から発した彼の言葉は、まさしく「世界平和」への訴えで、核廃絶を訴えた人でもあります。それで、ノーベル平和賞がおくられます。



私の小学生の時、彼は非常に有名で、そこら辺までを何となく理解していました。しかし、教会に行くと、牧師から、彼は、牧師なんだよということを知りました。彼は牧師の息子として生まれ、牧師になる事を目指して、大学で学び、その大学の先生になります。しかし、30歳になったときに、神学部の先生から、医学部の生徒になって学び直し、医者になるのです。それはアフリカに行って、貧

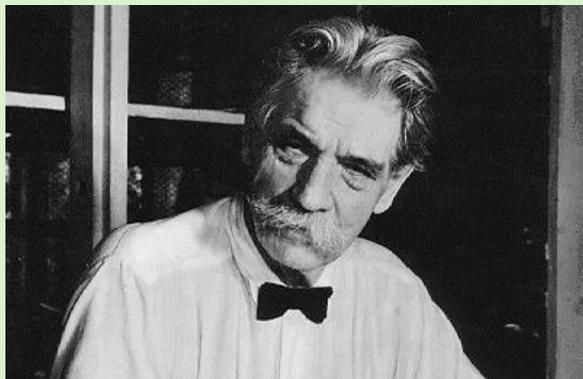
しく医療の届かない人たちの医療に仕えるためでした。

多くの事を省きますが、若い方々は、是非、彼に注目して欲しいと思います。彼は、牧師で、神学者であると共に、教会のオルガニストで、バッハの研究者でもあるので、たくさん、彼の書いた本や、彼について書いた本を手に入れることが出来ると思います。

私は、牧師として、そんな彼が、どうして、牧師であったのに、大学に入り直してまで牧師になったのかということは、興味あるところでした。彼の少年時代の貧富の差の経験などが、魂の問題と直結する、社会の差別の問題に行き当たったというよう

な説明がなされますが、ドイツの教会とも親しいある牧師が、彼について言われたことが、ストーンと落ちた理解として心に残っているのです。

神奈川県の下教会の元牧師加藤常昭師が、シュバイツァーのアフリカにおける写真集を開いていて、ある彼の言葉に出会ったことを紹介しております（『ローマ人への手紙Ⅲ』 p 287）。



「あるとき、ある本屋で、一冊の写真集を手にとった。アフリカで医療に従事いたしましたアルベルト・シュバイツァーのアフリカにおける生活を記録した写真集であります。私はシュバイツァーが大好きでしたから・・・一生懸命に立ち読みしました。その中にシュバイツァー自身の言葉が、写真の一コマごとにちりばめられてあります。あるひとつの言葉を、私は今で

も忘れません。シュバイツァーはこういう意味のことを書いている。こう書いてあったというのです。

「わたしは何故、医者になったのか、(牧師として) 愛を説教しないで済むからだ。」牧師である加藤先生は、この一言に出会ったとき、「愛を説く牧師である私にとって、これは痛烈な言葉です。忘れることができません。人に愛を説くことをやめた方がいい。わずかでもいい、その実践者になったほうがいい。だまっておいたほうがいい。嘘をつかないで済む。」つくづくそう思ったというのです。



さらに言うと、では、私は牧師をやめるのかと考えたと。そして言います。

おっしゃるとおり、牧師として講壇から「愛しなさい」との聖書の命令を人々に話す度に、私の心に愛が足りないことを、思い知らされるといいます。しかし、だったらどう語ったら良いのか。正直に言えばいい。そうだこう言おうと、彼は言う

のです。「私は愛に敗北している人間なのだ、正しくは生きられない人間なのだ、みじめなのだ。」と。でも、それでは、説教にならない。でも、教会の兄弟姉妹の中に、「私はダメだと」言っている人がいるとして、そういう人に、(私もダメだけど)『そうですねえ。あなたは本当にダメですねえ』と言えるというメリットもあるといえるのかも知れないと。そして、だからこそ、一緒に愛する事をしていきましょうと言えると。

なんとなく、苦しまぎれのようにも聞こえますが、そういう以外にないし、しかし、クリスチャンは、そう言えるのだということでもあろうかと思えます。

実は、私たち豊明希望チャペルの兄弟姉妹は、一緒にヨハネの手紙第一から教えられてきたのですね。そこには、「愛しなさい。愛のないクリスチャンはクリスチャンではありません。神を知りません。」と盛んに教えられてきたのですから、加藤先生の問題は、私たちクリスチャン全員の問、問題である事を思うのですね。

すなわち「私はクリスチャンではないのかもしれない。少なくとも、私はクリスチャンであることをやめたい。なぜなら愛せないからだ。」というような敗北感であります。しかし、だからこそ、加藤先生が言われるように、私はダメだけれど、しかしと言えると言うことであります。

なぜなら、私は、聖書から、愛すること、特に、具体的に愛する事、口先ばかりではなくて、行いで示すことが、仮に・・・たとい出来ないでも、人が、それによって、救われるのではなく、ただ、神の愛によって救われ、生かされている事を知っているからです。

少し、難しい話題というか言い回しになったかと思いますが、今日の箇所は、ローマ人への手紙において、パウロが、私はユダヤ人として、行いによってこそ救われると思っていた。神の聖さに生き、神と人への愛に生きる、そのことをもって、人間は義と認められる、正しい者にされると思ってきた。そして、努力してきた。しかし、人は、神の愛によって救われ、その神の愛に信頼することにおいて義と認められるのだと言うことを知ったと、今日の箇所で言っているのです。

ユダヤ人として、行いによって義とされるに熱心だった私が、信仰によって救われることが、神さまが私たちに期待しておられることだと知ったと、そういう、いわば、告白をしているのが、今日の箇所なのです。すでに読んでいただきましたが、今日の箇所を、今一度お読みします。短い箇所ですので、全部お読みします。

「10:1 兄弟たちよ。私の心の願い、彼らのために神にささげる祈りは、彼らの救いです。10:2 私は、彼らが神に対して熱心であることを証しますが、その熱心は知識に基づくものではありません。10:3 彼らは神の義を知らずに、自らの義を立てようとして、神の義に従わなかったのです。10:4 律法が目指すものはキリストです。それで、義は信じる者すべてに与えられるのです。」

さて、すでにローマ人への手紙をここまで一緒に学んできた教会の兄弟姉妹は、ここまでのところで、何が問題にされてきたかをご存じです。そのきっかけは、パウロのこのような本音、告白でした。「**9:3 私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。」**

パウロは、私は、信仰熱心だったと言います。神さまを信じる事に不真面目で、いい加減だったわけではないと。ただ、その熱心さの、その真面目さの方向性が間違っていたというのです。

結論的な言い方で言えば、私の熱心の方向性は、私と私を評価してくれる、私の「見せかけ」の素晴らしさに向いていたというのです。すなわち、神に向いてなかったと言うのです。

私の信仰熱心は、私が人に誉めて貰うためだったというのです。私はこんなに信仰

に熱心ですよ、私こそクリスチャンでしょと、私を自慢したい為だったというのです。

「10:3 彼らは神の義を知らずに、自らの義を立てようとして、神の義に従わなかったのです。」とは、そういう意味です。

神さまではなくて、人に良く見られたいと思っていた。もちろん、神さまにも良く見られたいと思っていたけど、その神さまが、私がダメだなんて、罪人なんて思っているとは思っていなかったと。神さまは、こんなに努力して、熱心な私をほめて下さるはずだと高をくくっていたと言いたいのだと思います。

そして、人も私をほめてくれた。パウロさんは、私たちと比較して、とても熱心な信仰者ですし、さぞかし、神さまに、一等賞と認めてくれておられるのでしょねと、そのくらいに思っていたと言うことです。

しかし、実際には、私は、神さまから見て、まったく箸にも棒にもならない、まったく規格外の、義とは認められない人間で、義人ではなく、罪人なのだと、あるとき気づいたというのです(ローマ 7:14~25 **「7:18 私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。」**)。

しかし、それで、わかったことがあるというのです。

私の熱心は、知識に基づくものではなかったと言うことです(10:2「その熱心は知識に基づくものではありません」)。その知識とは、神の人を測る罪のハカリが、非常に厳しく、だれも聖く、愛の人がいないと言うこと。しかし、神の愛は、私たちが思う以上に深く、聖い人、義を行える人を愛するだけでなく、聖くない人、罪人さえも愛し、愛し抜かれる人であると言う知識にも基づいていなかったと言っているのです。

「10:2 私は、彼らが神に対して熱心であることを証しますが、その熱心は知識に基づくものではありません。」とある通りです。

しかし、当初、私が願ったように、その知識を知らなかったユダヤ人が救われないのか、私は救われないのかと言えば、すくなくとも、私は、そんな知識不足のユダヤ人が救われて欲しいと願っているというのです。

「10:1 兄弟たちよ。私の心の願い、彼らのために神にささげる祈りは、彼らの救いです。」とある通りです。

そして、それでは、知識不足のユダヤ人が救われるのかということ、救われるというのです。それが、今日の最後に書かれている言葉です。

「10:4 律法が目指すものはキリストです。それで、義は信じる者すべてに与えられるのです。」

律法を完全に守ることに熱心だったが、律法の基準はキリストの基準だと言うのだと思います。キリストの基準は、はるかに聖く、はるかに完璧なものです。そこをめざすのだ。ユダヤ人が求めてきた、聖さの基準、愛の基準、義の基準をはるかにしのぐ、高き基準であるキリストの基準まで、私たちは到達できるのだと言っているように聞こえます。そして、それは、今まで以上の努力など出来るものだろうか・・・いや、可能だと言っているのです。それは、福音です。その福音は、キリストが、私たちが義と認められるために、十字架について下さり、私たちの罪が贖われ、罪なき者

として、神が認めて下さる、そういう方法が開けたという知らせなのです。



愛知県を含む、この中部地区の改革派の教会が出した本で、『現代におけるキリスト教信仰』（中部中会地方宣教研究所 1980）というのがあります。私が繰り返し読んだとても大事な本です。メイチェンという神学者の書ですが、彼は、神学校批判を行いまして、彼は、「実際、多くの神学校は、今日、不信仰の養成所です。・・そこを出た牧師が、教会をも墮落させるようになった・・」と大胆な事を言います。なぜ、不信仰なのか・・それは、「牧師や伝道者の反知的態度になかば起因する」というのです。バカだと言うことです。どういう意味でバカだと言われているのかというと、牧師もまたぞろ、律法に従うユダヤ人のように、パウロがそうであってはならないと言っているユダヤ人の

ように、自分を良く見せようとか、人にどう見られるかに関心がありすぎるのだと言うのです。すなわち、パウロの言う自分を立てるのではなく、キリストの贖い、罪の赦しに生きるべきだということです。私は、罪人ですと素直に告白して、神に信頼する、信じる、そのことを教えないことがバカだと言っているのです。

パウロは、ここで、罪の告白をしているのだと思います。私は、信仰の天才だと思ってきた。神もそんな私をこそ認めてくださるはずだ。人の評判もいい。しかし、私はバカだった。私が信じていたのは、神ではなく、私が信じ誇っていたのは、私自身であり、私は傲慢さだったと、今日のところで言っているのだと思います。

今週の歩み。私たちも、自分で、何かができると思う時こそ、まずは、静まって御言葉に聞き、私は神にゆだねてこそ歩むことが出来ると仕切り直して、そのようにして、徹底的に、そういう意味での信仰に歩む、そういう神の恵みの中をこそ歩む、そのような歩みとさせていただきます。